正徹の自筆懐紙・短冊拾遺（その一）

稲田利徳

正徹の筆跡は流麗である。「碧山日録」（巻一）では「一詠一唱、形於翰墨、則挙世珍之」とし、「和漢三才図会」（巻七十二）でも「得其筆跡者、珍襲而秘蔵矣」と、各々、正徹の筆跡が珍重されたことを伝えている。

歌道における名声と能筆のゆえに、正徹の書写本や懐紙、短冊類が長く保存されてきたことは幸いであった。

先に私は、拙著『正徹の研究中世歌人研究』で、自筆懐紙十二枚、自筆短冊二十四枚を翻刻、紹介してきたが、その後、多くの売立目録類の調査によって、さらにいくつかの自筆懐紙・自筆短冊をみつけることができたので、以下に紹介してみたい。

なお、歌番号や校合本文は『私家集大成中世Ⅱ』所収の正徹の和歌関係資料による。また、正徹の既知の和歌資料といった場合は、「草根集」のほかに、「永享五年詠草」「永享六年詠草」「永享九年詠草」「月草」「恋歌一軸」などはじめ、拙著の詠歌資料集成に含まれる和歌を指している。（懐紙・短冊類の表題は目録類のそれによる）。

○懐紙関係

(1)徹書記三首懐紙

詠三首和謌

正徹

餘花風

①さくら色ににほふや三月

夏山のしけみは冬の

雪のしたかせ

初郭公

②ほとゝきすさたかならぬや

あかつきの月さへ雲に

あへる初こゑ

旅泊舟

③夏の日のむしあけの松の

かけなくハ浪に風まつ

舟もかゝらし

この懐紙は大正三年六月の『一鶴菴及某家所蔵品入札目録』に写真版で掲載されているもの（以下、すべて写真版で掲載）。正徹の真

筆と認めてよい。三首とも、既知の和歌資料にみいだせないので、新出歌とみてよい。

(2) 徹書記懐紙

詠初春祝和謌　　正徹

④松かえにいやとし
　の葉のかすそへて千世
　にもあまる御代のは
　るかな

この懐紙は大正六年十二月の『志村氏藏品入札』目録に掲載されたもの。④の歌は「草根集」（巻一・七八七四）の享徳二年正月十一日の条の「三宝院准后一賢御会始に」としてみえるもので、相互に異文はない。

(3) 徹正記三首懐紙

詠三首和歌　　正徹

遠夕立

⑤たひ人の袖しほりてや
　八百日ゆくはま路宿なき
　すゑのゆふたち

樹陰逐涼

⑥夏来てそ世をすて人も
　あひにあふ樹の下石の
　上のすまひは

杣川筏

⑦みかさますまろ木のはしら
　そま川になかしそへてや
　いかたくらむ

この懐紙は大正十二年『及當地某家藏品入札』目録にみえるもの。正徹の真筆とみてよい。⑤⑥⑦の三首は、「草根集」（巻九）の宝徳三年六月二十三日の条の「左京大夫の家の月次に」の三首（⑤＝六九八〇・⑥＝六九八一・⑦＝六九八二）と三首連続して一致する。本文を比較すると、⑥の「人も」が「人に」、⑦の「いかたくらむ」が「いかたさすらん」の異文がある。但し、⑤⑥⑦は「月草」（三八・三九・一六八）とも一致するが、この方は懐紙との異文はない。

(4) 徹正記三首懐紙

詠三首和歌　　正徹

隣瞿麦

⑧袖ぬらすたかかたみかと
　かきこしにとはゝや庭の
　なてしこの露

朝氷室

⑨松かさき都のつとの
　しつくかも朝露こほる
　みちの夏草

寄衣雑

⑩心をはそめすよいかゝ
　しかまなるかちのころもは
　身にかゝれとも

この懐紙は大正十四年の『某家所藏品入札』目録に掲載されているもの。正徹の真筆とみてよい。この三首は「草根集」にすべてみ

え、⑧が巻四（三一七八）、⑨が巻四（三二八九）、⑩が巻六（五一四九）と各々一致する。巻四・巻六は詠歌年時不記の巻である。相互の異文は、⑧で「たかかたみかと」が「たか形そと」とみえる程度。

(5)徹書記冬四首詠草　　清岩

時雨

⑪くれ竹のみとりハ時もかハらねと
しくれふりにし雛ともなし

霜

⑫立田山木葉もあたにちりはてゝ
ゆふつけ鳥に霜ハをく也

霰

⑬をしなへてしくれしほとハつれなくて
あられにおつるならの葉かしハ

雪

⑭吉野山けさふる雪やつもるらん
入にし人の跡たにもなし

この懐紙は大正十四年の『木村家所藏品入札』目録に、東本願寺伝来として掲出されているもの。「清岩」とは正徹の字であるが、懐紙に字を記すことは他に例がなく、正徹の詠草かどうか、若干気になる。しかし、正徹自筆の「永享九年詠草」（大東急記念文庫）の末尾にも自分で「栢月清岩」と記しているので、自記しないわけではなかったようだ。この四首はともに既知の正徹の和歌資料にみいだされない。筆跡は正徹の真筆とは速断できない面を有するが、近似していることは確かである。正徹の自筆懐紙かいなか、若干の不安も残るが、一応、ここに紹介しておく。

(6)正徹三首懐紙
夏日同詠三首和歌　　正徹

更衣

⑮けさよりハ花のたもとを
たちかへてあかぬ名残の
うつり香もなし

鵜

⑯くれことにきゝてもあかぬ
こゝろとハしらてやわれに
なくほとゝきす

寄瀧戀

⑰つゐに身もしつミやはてむ
袖のうへになみたのたきの
ふちとなりなは

この懐紙は大正十四年の『県下大高町下村氏及某家所藏品売立』目録に掲載されているもの。写真版でみる限り、筆跡が正徹の真筆と断定しがたいふしがある。あるいは真筆本を転写したものでもあろうか。⑮⑯⑰の三首はともに既知の正徹の和歌資料にみえない新出歌である。

(7)徹書記三首懐紙
詠三首和歌　　正徹

山家秋夕

⑱世のうきめ見ぬハよのつね

のかれすむ山のいろけつ
秋のゆふきり
雲間澪月
⑲うす雲のかけ行月は
あくる夜のひかりにかはる
まとのともし火
羇中送日
⑳たひころも日もかさなりぬ
山こゑて舟路をゝくる
風をまつまに

この懐紙は大正十五年の『蜂須賀氏所藏品入札並売立』目録に掲載のもの。正徹の真筆とみてよい。三首のうち、⑱⑲の二首は「草根集」（巻十）の享徳元年八月二十六日の条の「平等坊円秀月次に」で連続してみえるもの（⑱＝七六七〇、⑲＝七六七一）。相互に異文はない。⑳の方は既知の和歌資料にみえない新出歌である。

(8) 徹書記三首懐紙横物

詠三首和謌　　正徹

時雨晴陰
㉑雪のうへにしくるゝ雲の
村きえや日影もとかぬ
しつくなるらむ
寒草處〻
㉒ゆく人の露わけかねし
草ハみな袖もさハらぬ
野への霜かれ
寄遊女戀
㉓浪路にてたえにしかちの
枕にもちきりしらるゝ
舟のうちかな

この懐紙は大正十五年の『京都平尾竹霞氏　鳥取金田後凋庵氏　所藏品入札』目録に掲載されているもの。まさしく正徹の真筆。三首のうち㉑のみは「草根集」の詠歌年時不記の巻五にみえるが（四〇一一）、他の二首は既知の和歌資料にみえない新出歌である。

(9) 徹書記三首懐紙

詠三首和謌　　正徹

夏江月
㉔陰すゝし春はいなさの
山のはにかゝるほそ江の
なみの三日月
市郭公
㉕たれかきくあたらはつねを
さととよむいちはのうへの
山ほとゝきす
羇中山
㉖かりころもたかねにこよひ
かたしきぬふもとの雲に
やともなくして

この懐紙は昭和二年の『肥前松浦伯爵家藏品目録』に掲載されているもの。正徹の真筆とみてよい。三首のうち、㉔㉕は「草根集」巻十一の享徳二年四月十三日の条の「修理大夫の家の月次に」で連続してみえる（㉔＝八〇二二・㉕＝八〇二三）。相互に異文はない。

㉙は既知の和歌資料にみえない新出歌である。

○短冊関係

(1)徹書記短冊

①冬暁山　さえいつる深山の月の在明に
くもらぬ雪のちるあらしかな　正徹

この短冊は大正五年三月の『尾州　川島　三輪　両氏所藏品入札』目録に掲載のもの。正徹の真筆とみてよい。①の歌は「草根集」巻七の宝徳元年三月二十六日の条の「泉堺より少々人をやとひて五十首の法楽をたてまつりし中に」のうちの一首（五五七四）。相互に異文はない。

(2)徹書記短冊

②窓竹　むかひみる人にも千世をかさぬ
今年生そふ窓のくれ竹　正徹

この短冊は大正六年三月の『外山氏所藏品入札』目録に掲載のもの。正徹の真筆とみてよい。歌本文の第三句の下部の空白は摩滅して解読できないが、「らむ」であった可能性が強い。②の歌は既知の和歌資料にもみえない新出歌である。

(3)徹正記短冊

③積雪　つもるらし木々の下おれをちこちに
ひもなき山の雪のくれかな　正徹

この短冊は大正八年五月の『徳島市森家所藏品入札』目録に掲載のもの。まさしく正徹の真筆と認められる。③の歌は「草根集」巻一の文安六年の「住吉法楽詠百首和歌」のうちの一首と一致する（八七四）。相互に異文はない。

(4)徹正記短冊

④里雪　一むらの里のしるへもうつもれて
ゆく人かへす袖のしら雪　正徹

この短冊は大正九年の『當市黒田家所藏目録』に掲載されているもので、正徹の真筆と認めてよい。④の歌は正徹の既知の和歌資料にみえない新出歌である。

(5)徹書記短冊

⑤納涼　水ちかき木の下風もなにかせん
人なきとこの枕ひとつを　正徹

この短冊は大正十年の『當市八木騎牛庵所藏品入札』目録に掲載されているもので、平瀬家旧藏とある。正徹の真筆と認めてよい。⑤の歌も、既知の和歌資料にみえない歌である。

(6)徹書記短冊

⑥朝山霞　たかためそ嶺の霞にいつる日の
くれなゐそむる春のさ衣　正徹

この短冊は大正十三年の『穠翠十亭神戸家所藏品売立』目録に掲載されているもの。正徹の真筆とみてよい。⑥の歌は、「草根集」巻九の宝徳三年二月二十三日の条の「草庵に人々きたりて」にある歌と一致する（六八一九）。第二句が「霞のうちに」と異文がある。

以上、正徹の自筆懐紙九枚、自筆短冊六枚を紹介してきた。自筆懐紙の歌二十六首のうち、正徹の既知の和歌資料にみえるものは十二首、新出歌十四首であった。また、自筆短冊の六首のうち、新出歌は三首であった。従って、十七首を新出歌として追加できる。これらの懐紙、短冊は、そのつど触れたように、ごく一部を除き、正徹の真筆と認定してよく、その点でも誠に貴重な資料である。

――岡山大学助教授――